

口紅と鏡

源氏鶏太



新潮文庫

かがみ 鏡 と べに 紅 くち 口

定価 480 円

新潮文庫 草 118 O

昭和四十七年十月二十五日 発行
昭和五十五年九月十日 十六刷

著 者 源 氏 鶏 太

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京 都 新宿 区 矢来 町 七 一
電話 業務 部 (〇三)(二六六)五一一
編集 部 (〇三)(二六六)五四二
振替 東京 四 一 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

口紅と鏡

源氏鶏太著

口
紅
と
鏡

第一章 過 去

事務室の壁の電気時計は、午後七時を過ぎようとしていた。久我杏子くがきょうこは、それを見上げているうちに、

（ああ、ちょうどあれから一年になるんだわ）
と、思った。

今までの日のことを忘れていた訳でなかった。いや、忘れようと努めて来たといった方が当たっていたかも知らない。といって、とうてい忘れられるものでないことは、誰よりもよく知っているのであった。

（一年……）

あらためてそのことを思った。ふいに目頭めがしらが熱くなってくるような気がした。

事務室の中は、ガラシガラシとしている。机の配置も一年前のあのときとそっくりであった。たった一つ違うところといえば、向うの席で同じく残業をしている柴田孝二しばたこうじのかわりに、村山彰むらやまあきらがいたということである。そして、これだけは、杏子にとって、まぎれもない事実となつて胸に迫つて来た。

しかし、その村山彰は、最早この世の人でなくなっているのである。

柴田孝二は、熱心にそろばんを弾^ひいていた。その横顔は、男らしいといってよかつたろう。そうなるに杏子には、ますます村山彰の面影が思い浮^うびれてくるのであつた。

杏子は、そうっと席^かを起ち、廊下へ出た。社内の殆^{ほとん}どが帰つてしまつていたので、人影がなかつた。その淋^{さび}しさがよけい身にしみてくるようであつた。

杏子は、手洗所へ入り、その鏡に自分の顔をうつした。そこには二十三歳の女の顔が、今にも泣き出しそうになつていた。しかし、杏子は、泣くまいと堪^{こら}えていた。ここでならいくら泣いたつてかまわないのだ。すこしぐらい声を出したつて、人に聞かれることはないだろう。杏子もそのつもりでここへ来たのである。しかし、思い直した。今頃になつて泣くなんて、みっともないだけである。そういうことは、自分を甘やかすに過ぎないと知つていた。その後がいっそうやりきれなくなるだろう。

しかし、そうとわかつていて、やはり思うようにいかなかつた。涙が溢^{あふ}れて来た。杏子は、涙の流れるにまかせておいた。ために、鏡にうつつた自分の顔が、ぼろつとかすんで見えてくる。が、さすがに声は、出さなかつた。声を出さないことで、涙がますますはげしくなつてくるようであつた。

（あたしは、いったい、誰のために泣いているのであろうか）

自分のためにか。それとも、村山彰のためになのか。そのどっちのためでもあり、どっちのためでもないような気もする。ただ、はっきりしていることは、あれから一年になるということであつた。

杏子は、事務室へ戻つた。

「久我さんは、まだまだ？」

柴田孝二がいった。

「いいえ、もうすぐです」

杏子は、顔をそむけるようにしていった。泣いた後の顔を見られなくなかったのである。

「いっしょに帰ろうか」

柴田孝二がいった。

杏子は、一年前にも村山からそのように誘われたのであったと思い出し、すこしためらって、それから、

「はい」と、答えた。

その一年前、村山は、その後で、

「久我さんは、二年前に会社を停年でお辞めになった高森さんが、渋谷でちいさなバーを開いていられることを知っている？」と、いった。

杏子は、初耳であった。

高森は、同じ総務課勤務であったのである。が、ちゃんと大学を出ていながら課長にもなれないで、停年を迎えた。課長にもなれなかった理由は、杏子にわかっていなかった。しかし、一種の気骨の持主であったから、あるいはそのことが出世のさまたげのようになっていたのだろうかとも想像したことがある。しかし、杏子は、いつだって優しくされたような気がしていた。だか

ら高森の名を聞くと、なつかしかった。

「知りませんでしたわ」

「僕も最近になって偶然に知ったのだが、そのバーの名がいかにも高森さんらしいのだ」

「何といたしますの？」

「ひらがなでだが、ていねん、なのだ」

「停年退職の意味ですの？」

「らしい。自分の退職慰労金をもとにして始めた店だから、本来なら漢字で停年としたかったのだが、それでは若いサラリーマンは寄りつかないだろうし、年を取ったサラリーマンは、身につまされて意気が上がらないだろうということで、ひらがなの、ていねん、に譲歩したのだと笑っていられた」

「はやってますの？」

「というほどでもなかったが、僕たちには、特別に安くしてくれるんだ。尤も、高森さんは、この会社の連中には、そうやたらと来て貰いたくないらしいのだ。だから黙っていてほしいということだった」

「そうですか」

「それに近くの中華料理店からラーメンやなんかを出前して貰えるのでたすかる。もし、厭でなかったらいっしょに行ってみない？」

「あたし、高森さんに久し振りでお目にかかりたいわ」

杏子は、バーということに多少こだわらぬではなかったが、高森の店ならと思った。それに村

山といっしょなのだ。二人は、すでに接吻^{せつぽん}している仲であつた。更にいえば、今夜の杏子は、家へ帰りたくないような心境になつていた。昨夜、父親と喧嘩^{けんか}をしてるのである。今は、父親の顔を見るのも厭なような気がしていた。そのことで今日は、朝から仕事をしていても鬱々^{うつうつ}とした気分から脱け出すことが出来ないでいた。

「よし、決めた」

二人は、早々に会社を出た。

東京駅から国電に乗った。すでにラッシュアワーを過ぎていたので二人は、うまく並んで腰を掛けることが出来た。

村山は、しばらく黙っていてから、

「今日の君は、どこかいつもと違うような気がしていたんだけど、何かあつたんじゃないの？」と、いった。

杏子は、はつとなつて、村山を見返すようにした。やはり、わかつていたのであろうか。ということは、村山が絶えず自分に関心を寄せていてくれたことにもなる。いい直せば、愛してくれているのだ。杏子は、嬉し^{うれ}かった。尤も、すでに何度も唇^{くちま}をかわしている仲であつてみれば、それくらいのは当然であつたかも知らない。

「もし、僕の思い違いであつたらそれでいいんだよ」

「いいえ」

杏子は、頭を横に振った。

「すると？」

「……………」

「勿論、無理にとはいわないが」

「昨夜、家へ帰ったら父が突然に再婚したいといい出したのです」

「再婚？」

村山にも思いがけなかったようだった。

「そんなの、厭でしょう？」

「お父さんは、おいくつ？」

「五十三歳です」

「五十三歳か」

その後、村山は、しばらく黙っていてから、

「お母さんの亡くなられたのは？」

「五年前です」

「すると、四十八歳のときか」

「あたし、そんなことをいい出すような父ではないと思っていました。亡くなった母だけを思い出しながら生きていく父のように思っていたのです」

「……………」

「だから好きただけでなしに、あたし、父を尊敬していたくらいなのです」

「……………」

「それなのに今頃になって再婚するなんて、あたし、父がいっぺんに嫌いきらになってしまいました」

た」

杏子の口調は、強くなっていた。

「相手は、どういう人？」

「得意先の会社に勤めている人なんですって。年は、三十五歳だそうです。三十五歳だなんて、まるであたしの姉のようなもんじゃありませんか。あたし、そんな人にお義母さんなんていうの、絶対に厭だわ」

「たしか、君のお父さんは、M産業の部長をしていられたんだったね」

「そうですわ」

「で、相手の人は、結婚の経験があるの？」

「あるんですけど、三年目に死別しているんだそうです」

「そのとき、子供が生れなかったの？」

「らしいですわ」

杏子は、一人娘であった。父は、自分のためだけでなしに、今後、杏子を結婚させるためのいろいろの準備のためにも、母親が必要であるからといったのである。しかし、杏子は、自分の結婚の準備のためにならそんな母親はいらないといった。

「第一、そんなことを口実にするお父さんが不潔だわ」

「不潔？」

さすがに父親は、腹に据えかねるようになっていった。

「そうですわ」

杏子は、負けていなかった。

「杏子は、このわしを不潔だというのか」

「お父さんがどうしてもその人と結婚なさるといふのであったら、あたし、この家から出て行きます」

父親は、黙り込んだ。途方に暮れているようであつた。父親にしてみれば、長い間、迷いに迷い、考へに考へぬいたあげくのことには違ひなかつたろう。しかし、いきなりこゝも強い反撃を受けるまでは思つていなかった。もうすこし父親というものを理解してくれていると思つていたのである。しかし、杏子は、まだ二十二歳なのだ。そういう期待は、甘かつたということになりそうである。

（この娘は、結局、いまだに亡くなつた母親が忘れられないでいるのだ）

無理もないのである。父親にとつても決して悪い妻ではなかつた。だからこそ、その後の五年間を清潔に過して來たのである。

「杏子」

父親は、口調を変えていった。杏子は、答えなかつた。

「一度、その人に会つてくれないか」

「厭です」

「決して、悪い女じゃアない。きっと、杏子だつて氣に入つてくれると思うんだよ」

「あたし、お母さんは、亡くなつたお母さん一人でたくさんですわ」

「そうか」

「お父さんは、そんなことをして、亡くなったお母さんに悪いとお思いになりませんか？」

「思うが」

「好きになってしまったとおっしゃりたいんでしょう？」

「と、思ってくれてもいい」

「だったらこの家へ入れないで、外でお囲いになったらいじやありませんか」

「杏子は、このわしに二号のような女を持てというのか」

「そうですわ」

「わしは、そういう世間並みのことが厭だからこそ、杏子の諒解^{りようかい}を得て、正式に結婚したいといっているんだよ」

「でも、あたしにしてみれば、そんな女の人と再婚なさるよりも二号さんを持って貰った方が、まだマシですわ」

「すると、杏子は、どうしてもわしの再婚には反対だというんだな」

「こうなったら反対はしませんが、そのかわり、あたし、この家から出て行きます」

「出て行って、どうするのだ」

「どっかのアパートを借りて、自活します」

「杏子の今の月給は？」

「二万五千円です」

「二万五千円でやっていけるのかね」

「ちゃんとやっている人だって、あたしの会社にいますわ」

しかし、杏子に必ずしもその自信がある訳ではなかったろう。が、寧ろ、そのとき考えていたのは、村山のことであった。こうなったら村山と一日も早く結婚してしまうことである。その後、父は、勝手にその女の人と結婚したかったらそれでいいのだ。そのかわり、杏子は、絶対にそういう女の人のいる家へ寄りつかない。

二人は、国電の渋谷駅で降りた。

「ねえ、あたしのいつていること、間違っていました？」

「いや、間違っているとは思わないよ」

「でしよう？」

「しかし、僕は、君のいい分を聞いているうちに、お父さんがすこし気の毒になって来たな」
「あら、どうしてよ」

杏子は、不満そうにいった。

「僕は、君には、男の生理ということがよくわかっていないと思うんだよ」

「男の生理？」

杏子は、すこしあかくなつたようだ。

「そうさ。まだ、五十三歳だそうだし、当然のことじゃアないか」

そのあと、村山は、

（僕だって、君が欲しくてたまらなくなるときがあるんだよ。現に、今夜だって）

と、いいたいのを我慢した。

「だから、あたし、外で囲って下さい、といった筈よ」

「しかし、お父さんは、そういう世間並みの真似は厭だ、とおっしゃったんだろう？　僕は、立派だと思ふな」

「立派なもんですか」

「で、結局、どうなったんだ」

「昨夜は、喧嘩別れのままよ。けさだって、あたし、一言も口を利かなかったわ」

「やれやれ、強情なお嬢さんだな。お父さんは、困っていられたろう？」

「らしかったわ」

「いい加減に妥協して上げたら？」

「まア、村山さんまで、そんなふうにおっしゃるの？」

杏子は、心外そうにいった。村山は、そんな杏子に、

（この分だと、結婚してからも、相当きつい奥さんになるかもわからないぞ）

と、思った。

だからといって、結婚をあきらめようとは思っていなかった。何としてでも結婚したいと思っていた。尤も、杏子のことは、まだ自分の両親にいつてなかった。かりに自分の両親が杏子との結婚に反対するとしたら、自分が長男であり、杏子が一人娘であるということだけであろう。しかし、杏子の父親は、かねてから杏子に婿を取ることを決定的な条件にしていなかった筈なのである。勿論、それに越したことはないが、杏子の意思にまかせるといっているのであった。そのように